



本村幸広さん

本村といいます。“大腸がん”となっていますが、その大腸がんの中でも私は直腸がんの手術をいたしました。手術して3年経ちますが、その話を少ししたいと思います。

先に言っておきますが、私はお坊さんではありません。また、抗がん剤の副作用で、この

頭になったわけでもありません。ごく自然なものです。では始めさせていただきます。

痔瘻の手術で見つかった直腸がん

私は長いことトラックの運転手をやっておりましたので、自分は非常に体が丈夫で体調もよく、健康だと思っていました。会社が行っている健康診断でも何も出ませんでしたので、本当に健康だと思っていたのです。でも3年前に痔瘻になりました。痔瘻というのは、手術をしないと治らない。そして手術をしました。無理をして、我慢して仕事をしていたために、非常にひどい状態になってしまったのです。それで診てもらった時は、すぐ緊急手術ということで手術をしましたが、手術をしてくれた先生が、「奥の方が何かおかしい」ということで、細胞を取って検査をしました。そこで初めて、がんが発見されたのです。MRIを撮って、どの程度なのか見ましたが、素人の私が見ても非常に大きかったです。思わず先生に聞きました。「先生、これは初期じゃないですよね」もちろん初期ではありません。できるだけ早く手術をしようということになって、手術をしました。

最初ががんの告知を受けたということも、それに伴う人工肛門増設の話も、実は他人事みたいにして聞いていたのです。実感がなかったのです。痛みもなければ出血もないし、実感がなくて、本当に他人事みたいに聞いていました。でも、今ここでこうやって話しをできているということが、私は非常にうれしいのです。それはなぜかという、がんの手術が終わった後、ストレッチャーで運ばれる途中、私は出血しました。腰の辺りが真っ赤になっていたと、見て

いた人は言います。もちろん私は麻酔が効いて眠っていたので、全然そういうことは分かりません。でもそのとき担当してくれた看護師さんが、私を呼んでいるのです。その声が聞こえたのです。「本村さん、血液型は何？」と大きな声で呼んでいるのです。私は目を開けました。そしたらすぐ目の前で、担当してくれた看護師さんが必死な顔をして、大きな声で呼んでいるのです。知っているはずなのに何だろうと思いました。「A型」と答えましたが、果たして声になったかどうか、私には分かりません。すぐ目を閉じてしまいましたから。気がついた時は病室でした。あの後輸血をして、徐々に血圧が上がっていったのだそうです。

術後の落ち込みから抜け出させてくれた仲間が存在

先程がんの告知も、他人事みたいに聞いていたと言いましたが、自分の体を見て、初めて愕然としました。なぜかという、まずお腹を見て、ホッチキスの親玉みたいな金具が切った後にダーツとつながっているのです。それから、お腹の左側に赤いものが出ています。その赤いものは、最初は分かりませんでした。それが腸だと分かって、しかもそれが人工肛門だということが分かって、初めて愕然としたのです。

一体自分の体はどうなってしまったんだ、それから私は落ち込んでいきました。本当に落ち込んで、落ち込んで。考えることといたら、一体これからどうなるのだ、自分の体はこれからどうなるのだ、どうしたらいいのだ、何でこうなってしまったのだ、そういう思いが、頭の中をぐるぐる駆け回るのです。テレビを見てもおもしろくない。読もうと思っていた本を持っていても集中して読めない。当然夜も眠れません。どうしたらいいのだ、これからどうなるのだという、そういう思いばかりが何日も続きました。

でも、あることがあって、私はそこから抜け出すことができたのです。その抜け出した後、病院の掲示板でがん患者の集まりがあるのを知って、外出許可をもらい出かけて行きました。そしてそこに行った時に思ったんです。ここには自分と同じ分かり合える仲間がいるのだ、そ

う思いました。そういう人達の話聞いて、勇気付けられ、元気付けられ、励まされて、そして助けられたんです。また、自分のことを話すことによって、精神的にも非常に楽になりました。仲間がいるというのは、本当に良いものだなと思ったのです。

放射線治療

痔瘻の手術の傷が治ってはおりませんでした。先生は「もう待てない」と言うのです。「治療を続けよう」と。放射線治療が始まりました。30日間リミットいっぱいまでかけました。始まる前に言われました。「放射線を当てると、傷の治りが極端に遅くなるよ」。本当に遅くなりました。3年経ちましたがいまだにそれは治っておりません。ちょっと尾籠な話ですが、私はまだガーゼを当てている状態です。本当に放射線は恐ろしいものだと思います。

放射線治療が終わった後、退院してすぐ今度は抗がん剤の服用でしたが、これを半年間続けました。半年かかって、結果を見ようということになって、MRIを撮り、エコーとか諸々やりました。そのMRIの写真を見ながら、先生が言うのです。「ここは大丈夫なんだよな、ここは大丈夫。無いんだよ。でもここにあるんだよ」。そのあったところが骨だったんですね。骨に転移していたんです。でも、内臓は大丈夫でした。だから放射線や抗がん剤は効いたのだなど、そのとき私は思いました。

骨も骨シンチグラフィというのがあるって、それをすぐ撮ったのですが、尾てい骨の少し上の方にあるだけでした。しかし、放射線はリミットいっぱいまで使ってしまいましたので、もう使えません。少し様子を見ようということになって、それ以来何の治療も薬も、何もしていません。それで現在に至っているわけです。

治療を続けるためにお願いしたいこと

骨に転移するまでの間で、私が感じたこと、3つありまして、それをお願いしたいと考えているのです。その1は、製薬会社の方がおられましたら、是非お願いしたい。抗がん剤をもう少し安くして欲しい。何が痛かったかといって、この抗がん剤の高いのが1番痛かったですよ。(拍手)

2つ目は、生命保険会社の方がおられましたら、是非お願いしたい。付き合いで生命保険に1

つ入っていたのですが、これはがん特約が付いていたんですね。非常に助かりはしたのですが、抗がん剤までは含まれていなかったんです。だから、後付でもいいので、抗がん剤特約なんていえるものを、是非付けて欲しいなと私は思います。

3つ目は、会社の経営者の方がおられましたら、これは是非お願いしたいのです。がん患者の中には、まだまだ働ける方がたくさんおります。確かにがん手術は、回復するまでに長い時間がかかります。復職される方を、どうぞ温かく迎えて、そして何よりも理解して欲しいのです。この理解力が不足していると、がん患者が働くということは、非常に辛いものになっていくと思います。何よりも職場の方には、理解をして欲しいのです。

がん患者は大きな手術をして、辛い治療にも耐えて、頑張りに頑張って、肉体的にも精神的にもぎりぎりのところで闘ってきているのです。だから強い人間なんです。仕事の理解力も技術力も、やる気も十分です。私も十分あります。こういう人達が働きたいと望んでいるのに、結構冷たいんですね。会社の人達は宝の山を見逃していると、私は思います。人材を求める時に、同じ所だけではなくて、視野を広げて採用して欲しいのです。

障害は不便だけれども、不幸ではない

1分というふうに出ましたので、あとは切れてしまいますが、人工肛門について少し話をしておきたいと思います。この排泄というのは、毎日のことなんです。手間がかかって面倒でもあります。いっそもう投げ出そうかと思っても、そうはいかないんですね。これは死ぬまで続きます。人工肛門は、自分で排泄のコントロールができません。自分の意思に関係なく出てしまいます。どうしても防ぎきれないのが、音と臭いです。ちらっとでも臭ったら、すぐトイレに駆け込んで、装具を交換しなければいけません。音も静かな場所で、出て欲しくないなと思う時に限って出るんですね。

私は今電車通勤をしておりますが、座席のところにはできるだけ立たないようにしています。座っている人の顔の前で、いきなり音が出たらびっくりしますよね。だから、できるだけ立たないようにしています。

そういう状態の時に、1つの言葉を知りました。それは「障害は不便ではあるけれども不幸

ではない」この言葉にどんなに勇気付けられたことでしょうか。本当に勇気付けられました。これはヘレンケラーが言った言葉です。「障害は不便だけれども、不幸ではない」。

もう時間がありませんので、この後色々話そうと思っていたことは割愛しますが、この中に、もしひとりで悩んでいたたり、話す相手がいないとか、そういう人がもしおられましたら、是非仲間を見つけて欲しいのです。現状を理解して、

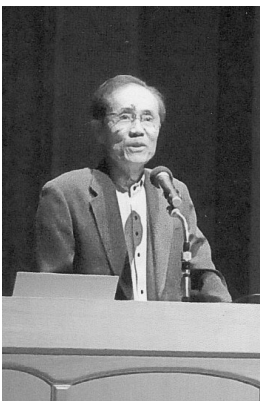
自分がどうあるべきかということを探って欲しいのです。仲間と一緒に。励まされて本当に助けられます。

最後にもう一度、ヘレンケラーの言葉を言いたいと思います。「世の中に苦難は満ちている。然れども克服もまた満ちている」これを最後にしたいと思います。どうもありがとうございました。

体験発表②

肝臓がんを体験して

篠田 省輔



篠田省輔さん

私は肝臓がんを二度経験しております。不幸中の幸いでありまして、早期発見・早期治療ということで、最新の治療が受けられ、救われました。しかし、いわゆる先生方のおっしゃる言葉では、経過観察中でありまして、今後何が起こるかは予断できません。比較的短期の間隔でエコーやCTで定期的に検査をして頂いております。

おかげ様で今現在は、日常生活は支障がありませんで、ここでこうしてお話ができるような状況でございます。この間多くの先生方や看護師さんに、大変お世話になりました。また、患者会の皆さんからは、大変温かい励ましの言葉をいただきまして、勇気付けられました。この席を借りまして、御礼を申し上げておきたいと思っております。

二度の肝臓がんは経験しましたが、仕事には恵まれておりまして、現在73歳ですが、昨年8月まで、72歳まで仕事を続けることができました。50年間の現役ビジネス生活を、やっと全うすることができました。したがって、これからは私のような患者が発生しないような運動といえますか、活動を是非続けて、少しでも肝臓がんの患者が減るように、いささかの役割を果たしたいと思っています。

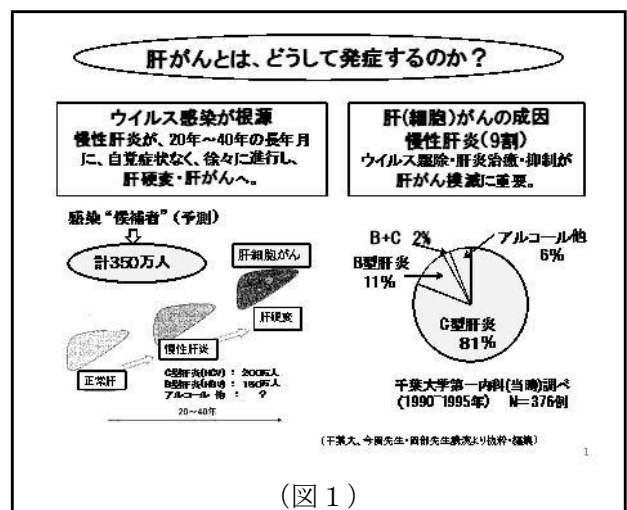
肝炎・肝臓がんはどうして発症するのか

図1は市民公開講座の、千葉大の先生方のお話してから、抜粋しまして、私が編集したものです。

肝臓がんとはどうして発症するのか、他のがんと少し違うところがありまして、予め発症が予測される方がかなりたくさんおられるわけです。ここに示されている様に、私のような肝臓がん発症者を調べますと、約80%がC型肝炎患者なのです。B型を含めると、90%になるのです。9割がたの肝細胞がん患者は、このような肝炎患者で占められています。

私がここで言うまでもなく、ウイルスが根本原因であります。そのウイルスに起因する細胞の破壊が、徐々に長年続きまして、全く本人は無症状、あるいは感覚的には健康だと思っている方が、20年、30年、あるいは40年経ちますと、肝臓の繊維化が進みまして、その後肝硬変や肝臓がんになります。振り返ってみますと、私はその典型的なコースを進んできたように思うわけでありまして。

これはここだけではなくて、一般社会全体に申し上げたいのですが、日本でこういう候補者といえますか、患者の予備軍が、350万人というように予測されているのです。C型肝炎が200万人くらいで、B型が150万人くらいと言われ



(図1)